

14節に「弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には1つのパンしか持ち合わせていなかった」と書かれています。すると、イエス様は「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種に気をつけなさい」と言われました。ファリサイ派の人々は律法の知識を持っていると自認し、ヘロデは傀儡政権の座に着いて世俗的な権力を持っていました。「持つ」という単語エコーは「出来る」とか「可能性がある」という意味があります。

弟子たちは、自分たちがパン屑を入れた7つの籠（スプリドーン）を持って来るのを忘れパンが1つしかないことに不安を感じて議論をしていたのです。するとイエス様は「目があっても見えないのか、耳があっても聞こえないのか、覚えていないのか、まだ悟らないのか」と言われました。「まだ悟らないのか」は2回言われました。持っていれば出来るが、持ってなければ、何も出来ないと考えるのではなく、欠けているから出来ることがあるのだとイエス様は言われたのではないのでしょうか？

昔、ドイツのワイツゼッカー大統領が1985年5月8日にドイツ連邦議会で、ドイツの敗戦40周年に当たり、「荒れ野の40年」という演説をして、「過去を大事にしない者に、未来はない」と言いました。ヘブライ語では「前」は未来ではなく過去を意味します。ボートを漕ぐときのように、出発点を見ながらボートを漕ぐと真っすぐ進んで行けると同じです。第一次世界大戦の敗北で経済的にダメージを受けたドイツが未来を切り開くために軍事力で勝たねばならないと侵略を開始したが、それは間違いであったと悟らねばならないと言うのです。

私達も神様から受けた恵みや解決や赦しを忘れ、何かあるといつでも一から大騒ぎして、慌てふためいてしまいます。しかし、私たちは、イエス様が一緒に乗り込んでくださっている船に乗って生きていることを忘れてはいけません。「悟る」スニエーミは、スン（共に）イエーミ（送る）で気持ちが通じ合う、合点する、物事をつなぎ合わせて共に理解する、という意味です。「誰と？」というと、「イエス様と」です。イエス様とスン（共に）生き、働き、奉仕するとき、不可能が可能となり、貧しくて欠けていることが大きな恵みの体験に繋がるのです。また、「貧しい隣人と共に」助け合って生きようとする時、欠乏は愛の入り口となり、人と人を繋ぎ合わせる機会になります。イエス様は不安な時代に生きる私達にも「まだ悟らないのか」と言っておられるのではないのでしょうか。